

妊娠期における唾液物性の変化について

ピジョン株式会社 中央研究所

平田 尚子、板子 絵美、斉藤 哲

【目的】

妊娠に伴う身体の変化は様々であり、その一つとして口腔内環境の変化があげられる。今回我々は、妊婦の唾液採取を行うことで、妊娠期の唾液物性について検討した。

【対象と方法】

対象：妊婦 19 名、対照群として非妊婦 17 名。

方法：5 分間の安静時唾液を吐出法にて採取し、重量、pH を測定した。pH は、pH メーター、総タンパク量は、分析までに -18°C で冷凍保存後、Lowry 法にて測定した。唾液採取後に質問紙調査を行った。

【結果】

唾液重量の平均 (SD) は、妊婦; 1.71g (0.94)、非妊婦; 2.12g (1.32) であり、妊婦のほうがやや少ない傾向がみられた。唾液 pH の平均 (SD) は、妊婦; 6.84 (0.44)、非妊婦; 7.18 (0.31) となり、妊婦のほうが有意に低いことが確認された ($p < .05$)。唾液中の総タンパク量の平均 (SD) は、妊婦; 3.17mg/ml (1.25)、非妊婦; 1.86mg/ml (0.90)、妊婦のほうが有意に高いことが確認された ($p < .05$)。

【考察】

測定結果から、妊婦は非妊婦に比べて、口腔内がより酸性な状態にあり、より粘性の高い唾液、つまり口腔内の‘粘つき感が高い’状態であることが推測された。今後、同一対象者の産前から産後におよぶ縦断測定を通じて、妊娠期に口腔内環境の変化を検討していく必要がある。